

くろう者・手話関係者文教警察委員会傍聴③>

3/12(水)、文教委員会三日目

いよいよ採決の日がやってきた。

午前は警察関係の審議、採決は午後から行われるとのことで、昼過ぎにモニター室に集合。本日はろう者8人、健聴者7人、通訳者2人

委員会室に入ったのは山本事務局長、小倉局員、藤原友子理事。

それ以外はモニター室での傍聴。

大場勝男文教警察委員長が、委員に意見を求めた。

平成21（浜松市北区）野澤義雄議員

「賛成の立場から意見を述べる。議論が集中した24号議案校名変更について、特別支援教育の方向性を否定するものではない。関連のみなさんが陳情、ご指摘されているろう教育の手話教育や専門性の低下は今回の議論を踏まえ教育長からは『それらは保つ』と力強い答弁あった。12月末の唐突な話。十分な意見交換できていない。こういった県教委の姿勢に大きな反省を求める。県民、当時者もこの名称（特別支援教育）に慣れ親しむ努力が必要。通称、愛称も用いるよう検討。」

民主無所属クラブ（下田市・賀茂郡）鳥澤富雄 議員

「議案に賛成の立場から意見を申し上げる。聴覚障害者協会の陳情、説明の要旨は十分理解。大手新聞に載った『差別的』発言は当然のことながらきびしく正したところ『そのようなことはない』という答弁。聴覚障害者協会の反対理由はまことにごもつとも。協会の懸念①「聾であること」への誇りを尊重する。②他障害との統合はない。③手話教育・手話文化をおろそかにしない。この答弁は重く考えている。この問題で、協会と県教委は信頼が失われているが、継続して話し合うことを望む。」

委員会では、議案が一括審議される。

傍聴していたろう者や手話関係者だけではなく、誰もが、家で、職場や学校で心配している。聾学校の名称は今後の歴史から消えるのか？

委員長の「原案通り可決すべきものと決定した」と伝えられた瞬間、涙を浮かべる会員がいた。下を向いて唇をかみ締める卒業生がいた。首をふって「ダメ！ダメ！」という老人がいた。

可決は避けられなかったが、ほとんどの議員が県教委に厳しい指摘をし、今後  
も継続して話し合いを行うよう望むとの意見を述べた。

委員会での決定を受けて、19日の本会議では可決される見込み。

終了後、山本事務局長がマスコミの取材を受けた。

本日、夕方 SBS が『聾学校』の校名変えないで」と題し、3/7（金）の署名  
提出から、今日の可決までを大きく報道した。画面からは、伊藤会長の表情か  
ら怒りが伝わってきた。記者は『聾』という表現に対する考え方や対応は様々  
ですが、一方的な変更では、関係者の理解を得られません。平行線のまま押し  
切るやり方ではわだかまりは残ったままです。」と締めくくった。

静岡朝日テレビも『聾』が校名から消える」と放送。山本事務局長は「校名変  
更は残念でたまらない。これからも『聾』という誇りを持った言葉を、後世に  
伝えていきたい。」とコメントした。